Music

いにしえのハワイを感じさせるインスト、『ティキ・タブー』のサーフギター・サウンズ

Text: George Cockle
文／ジョージ・カックル

ハワイのオアフ島のワイキキからアラモアナを抜けて、飛行場に向かう途中にサンドアイランドという倉庫街がある。そこはあまり観光客がくる場所ではないが、奥には1957年にオープンしたラ・マリアナス・セーリング・クラブという昔ながらのティキ・バーがある。ここはティキがいたるところにデザインされたバーで、店のインテリアはまるでハリウッドがポリネシアのロケに用意したようなつくりだ（鎌倉の七里ケ浜にある珊瑚礁も、そんなティキ・バーのテイストだ）。ラタンのいすに座ってドリンクを頼むと、プラスチックのティキ模様のタンブラーに入ってきて、もちろん鮮やかな傘が刺さっている。昔はこんなスタイルのティキ・バーがハワイにはたくさんあったけど、みんなファストフードのレストランのおかげで閉店してしまった。ラ・マリアナス・セーリング・クラブはそんな店からさまざまな物を集めてきている。シェラトンのコンティキルームからは大きなティキ、ドン・ザ・ビーチコーマーからはコナウッドの大きいテーブルを持ってきて、インテリアはさらにスケールアップした。

最近の話だが、この店で話題になった不思議なバンドがいる。それはティキ・タブー。毎年夏になると、暑さと日本でも一緒にハワイの音楽がラジオやテレビに流れてくるよね。そのハワイの音楽というと、フラ系のトラディショナル音楽、またはジェイク・シマブクロが代表するウクレレ音楽、あるいは70年代のカラパナ風ロック。最近ではこの10年はやっている、ジャック・ジョンソンの音楽が思い浮かぶだろう。しかしハワイにはそれほど知られていないが、いくつかの違う音楽もある。もちろん若者のロックもあるし、パニオロというハワイアンカントリーもある。なかでも忘れてはいけないのが、マーティン・デニーのエクゾティカラウンジ・ミュージックという音楽だ。昔はこのラ・マリアナス・セーリング・クラブのようなティキ・バーではよくかかっていた。しかし最近ハワイで話題になっているのは、この店によくライブをするバンド、ティキ・タブーのインスト・サーフ・ギターサウンズだ。

ティキ・タブーの音楽は、60年代に流行っていたサーフ・ギターのベンチャーズやデュアン・エディの影響を受け、今風のテイストにしたものだ。ティキ・タブーの音楽はシンプルでクリーンだ。僕といえば、ティキ・バーが流行っていた時代にトリップしてクラクラしてしまう。聴いたことがなくても、懐かしくなってしまうような音楽だ。メンバーは非常に柄が悪いジャケットを着ている男3人と、非常にきれいな女性が一人。彼達はハワイのさまざまなバンドのバックをやってきたベテランメンバー達だ。彼らのデビューアルバムはテケテケギターのクラシックソングだらけ。ワイプアウト、テキーラ、キャラバン、スキヤキ（上を向いて歩こう）もカバーしている。ジャケットに曲のクレジットが書かれていないので定かではないが、オリジナル曲も数曲入っている。今年の夏はこのバンドのCDをプレイヤーに入れて海に出かけ、傘が刺さったマイタイかピニャコラーダを飲むのはどうだろう。きっとラ・マリアナス・セーリング・クラブに行ったような気分でくつろげるに違いない。ハワイに行く予定があるなら、もちろんこのバンドのライブに行くのをすすめるよ。いにしえのハワイにどっぷり浸れるはずだ。

ジョージ・カックル●60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴40年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com

©George Cockle / On The Board